

周易鈔

大畜 损 睽 履
中孚 漸 震

四

山天大畜

○繇曰、大畜利貞不家食。吉利涉太川。大畜也。小畜吉。勿用。勿若。或孚惠心勿

其方のちあらひのと、山の中ふたまつたの象ぞ、ノホにてハ正徳
勲功を内ゆき積充をあまし、よに位シラヰをあらむ。天の福被て、
衆人の銀難をもあひめぐものいとなくある事ぞばくわゆく、
あきこむ様カニラたゞ、徳業勲功を積充をあらば、大畜の用よ
かくすくちひり、

○彖曰、大畜剛健篤實輝光日新其德、剛上而尚賢。

能止健犬正也、と云は大畜の徳なりと乾ハ剛健小一元ニ

厚ヨウ小良ヨシウ寫实ヨウジのあつまること何をもすか爾ヨウの熟切藝術ヨウセイガ

厚く實ヨウシれセバ、自趣ヨウジ光明めらうとせあり、けし翁ヨウシと云ふ也

ナリ情ヨウジも更厚ヨウシれバ、弥日小まヨウシて新ヨウシむと云ふ也、
象曰天テニ在山中アハヤニ大畜タクシ君子以多識ヤシモツテラシ前言往行シツテセン以畜其

徳ヨウジ、とは君子は卦の象ヨウジと云て、小ヨウシの重復ヨウシの言行ヨウシ成

開ヨウ是ヨウシ以來ヨウシ、ふく誠ヨウシしゆく、モ體ヨウシせなよるをも、吉經ヨウシ人ヨウシの言行ヨウシと聞ヨウシ、小ヨウシ徳ヨウシや大ヨウシきの慎ヨウシふてよき事ヨウシ、
○初九有厲利已ヨウリヒ、はあるよ處ヨウシら陽剛ヨウシ少ヨウシて、モ体健ヨウシ勿ヨウシ厚ヨウシ。

よりあつてもうち進ヨウシものぞ、然ヨウシきも、とよあつものぞ、きともも
ろがまヨウシで、モ無ヨウシ小敵ヨウシして、是ヨウシが後ヨウシ進ヨウシむと、してハ危ヨウシ、
小ヨウシり、まづそ焉ヨウシしも利ヨウシあ、はらわ小ヨウシて、がのきヨウシ精ヨウシ持ヨウシて、
トよ遠ヨウシて、もく金ヨウシをヨウシの情ヨウシ少ヨウシて、もくらう、
莫ヨウシあく莫ヨウシ、と、情ヨウシどもくらう、

○象曰有厲利已ヨウリヒ不犯災ヨウハシ也、と云は危ヨウシとは壓ヨウシめてよき
事ヨウシ、犯ヨウシ犯ヨウシして行ヨウシからざ、其時悔ヨウシと不度ヨウシして進ヨウシむと、してハ

莫ヨウシあく莫ヨウシ、と、情ヨウシどもくらう、

○九二輿說輶ヨウシ、はあらまぬと云ひたもの、と云めらうと支ヨウシの
きヨウシも、中道ヨウシゆきうり、失ヨウシもぞけしわすて、抑ヨウシ剛健ヨウシの徳

ありて、黒子ノ志あつた。財の匱からざると見て、八車の轎城
といふ。行ざるべく、進むを禁す。時てよきなり。

○象曰、輿說輶中无尤也。と云ハ輿說輶て行ざるをハ
其支トキ道加ハシム。勤むをと宣稱失するをす。休
時の宣をまかり、追もざるの時ふくをかかしてよきなり。

○九三、良馬逐利艱貞。日閑輿衛利有攸往。けぬり
歟と乾剛の極小く下のよよ居り。五爻ともと合せて進むどもと
良馬のよよ居り。跡を共剛より。早速進むを禁む小ちう。隼鷹の
をも。せなり。己あめて。艱難貞固を守る。ひは性歟。小利ある

とをげしわよ情ぐよにあり。

○象曰、利有攸往上合志也。吉もとを志と和合して、上合
とより。吉じとよとをもと情。剛強よろび方極よ情あらば
進むを紳せんとすり。

○六四、童牛之牿元吉。けぬ。而は、大辰。小の傍よまで、上
の邪。と産め下のありに支とども。もよおしてモ初支の徵。其時
をも。もきバ制。一屋にあり。其支尊よなりて。どめんとす
制。がふして。刑もをすくねるもの。是を童牛の財よ牿として。ぬせぐ
角をも。身を支あらひのぞ。是を童牛の財よ牿として。ぬせぐ

ぢには後よ觸て物を壓ぶるの患あひすたうけいは少て下
の悪とと、未^ハ屏の前よふせき、とどもの皆あこばなしをあり
どふ事あり、

○象曰、六四元吉、有喜也、ともは物ぞありと豈はて、
先とどめんとまれば、モ制禁^シ辛勞^{ラウ}ありて、下^{アシ}の刑^{ケイ}より
あむとあり、猶^ヤより恐^ミとのサーサ^シ前^ハ、とどもとあきバ制^{セイ}する
とも易^{ヤス}て傷^ハらむかずて、たよ^ト事^ハて、善^{ヨロシ}のみあり、
六五^{ハサル}永^{イニコト}不^{キバリキツ}吉、けあくよみを除^{ハシメ}、而^{ハシメ}少て、君^ノの位^{ハシメ}、下^ト
トの忍^{ハシメ}、とめ壓^{ハシメ}んとまろぞ、永^ハ剛^{シテ}、柔^{キハ}なきにあり、

其牙^{イッカ}を制^{セイ}せむして、モ弊^{ハシメ}断^{ハシメ}去^ハバ、あづから^{ハシメ}剛^{ハシメ}の壓^{ハシメ}ぐく、
一家^トそのふやも行^{ハシメ}りとまろぞ、^{ハシメ}能^{ハシメ}ばづく時^{ハシメ}、モ^{ハシメ}る
ものあづら^{ハシメ}るのふとある、けいわと情^{ハシメ}あまてよむあり、

○象曰、六五之吉、有慶也、^{キツハアル}ヨロシビ
ぞ、刑^{ハシメ}とま^{ハシメ}し全まれば、壓^{ハシメ}らる^{ハシメ}更^{ハシメ}一^{ハシメ}て功^{ハシメ}しとく^{ハシメ}半^{ハシメ}
と印^{ハシメ}て制^{セイ}する時^{ハシメ}常^{ハシメ}せざして、用^{ハシメ}信^{ハシメ}もとく、あう^{ハシメ}まろのぞ、然^ハ
天下の慶^{ハシメ}と云^{ハシメ}うぞ、常^{ハシメ}たりとけいわをて吉^{ハシメ}也、
○上九、何天之衢亨^{トラレ}、けあく^{ハシメ}正^{ハシメ}占^{ハシメ}卦^{ハシメ}の頂^{ハシメ}て^{ハシメ}、^{ハシメ}云氣^{ハシメ}
もなづ^{ハシメ}ごく^{ハシメ}、物^{ハシメ}のとこ^{ハシメ}やうり^{ハシメ}く、道^{ハシメ}のとく^{ハシメ}をこふら^{ハシメ}るの

焉や、はひおせ情ゆ私あらとあく、云の行あらばさうり、なう
らむと云矣や、

○象曰、何天之衢亨、道大行也。と云ハたとひとめらき
とあま共、とけて人のまく少くよ行らるゝをあももときも、正
と失、さみの情少てよりあり、
○元龜曰、竜潛、大山之課、と云ハ、徳あきらへのあら
ざりの功を極て盛とままであもも、是と積小成大と云
焉や、

○ト解曰、内乾外艮、内健外實、と云は、肝腎肉のモニキラ
少が至実体の徳ありて、強財あつまるをあらん也ハ天の事
物を重くすて、あまゆすて、今もあごむの時もて吉也、
○ト彖曰、如火入積、畜貨財、盈溢、と云は、天のちあらりのと山
の牛羊積畜ぞく、財用盈溢、もて、よに變あらむ事によく
付て、惜ぬせき、積てよく教ぢる心わから。殊く天より祥あきて、
主に幸を也、
○ト象曰、大畜、從末畜聚、多才よた宜あるを、宜利ある支
を未だ、どもつたある財れ、いもともとあじしあらきみがく
とし、後悔するが、心事不極り、跡を改々新よあらかとあも、

○十干詩前曰、目前多蹇滯、事の滞みあづむらむあらむ。

情あバ財の重病也と通る事あらむと云ふや。

○評曰、横立勲功論訟被抑、と云ハ御あまき、勲功を以て、
偏私の事をバキク懲どよひで、抑されば理の因からざる事ある
ぞ、わはよからざる事も、後には吉と如事とせしけの所ほじ
めばよきあり、

○山澤損

○繇曰、損有孚元吉、无咎可貞、利有攸往、曷之用、二簋可
用享、一簋豐薄る事無むぞ、拘乃吝びりと損して、理ある。

グバ损ある所過差なし、すとんと壁紙上への損をうなが
ち過ふ及あきバ、正邪不害あり、去道よ、二簋用享、则乃
敷あきバ、損き知ゆかうひ、穴よ河、えと、おぎ、二簋八質
素なる孔の窓なり、飾と損して、牆至比義を失、是れ道す
あつて、飾様損きは内慎みて、吉あり、

○彖曰、損下益上、其道上行、ことあハ下と損して、上と益ス

トハニも道上りゆく事なし、民モ一つたげて、君を富むる者
うきい人より道よ遠トヨカリ、或ち我身を捨てて、又又モ忠孝を匿
事ヒ、臣子なる人乃道をもよんこ、一益を用と享せらる者ぞく、
飾リとならばして、寔と虚一、或と換一、是ガち極端極不情至
て、よりなり、

○象曰、山下有澤損君子以懲忿窒欲。山下山の下よりあはれ、
損の象よりかず君す是と見て、忿極やめ、欲をふきでの義理と
むけに翁まで心のいとこじ居め、欲の道を窒しまりて、
正をぢり、莫ニシ行ふ所よ慎よ慎で、よりなり、

○初九、己事、遄往、无咎、酌損之。けあれ主事、剛のきりを損て、
柔乃反らずに其益、よよ怠じて、其支が速よもつて、咎なき損、
けりわざる、主功ありた、功のみよほあるとく、我と換して、
きふ及ばぬ所よ、主寫量ね無ふり、益ノ斟酌慎まよと、
象曰、己事、遄往尚合志也、といふは、何よたゞが用らぐ、
トハ、よくと志極合まおがたなり、せんねよて、おのきと換して、
より益情あきて、吉なり、

○九二、利貞、征、弗損益。けり、主而剛中と下と換を
の内よ敵、よよ敵する处、その陰柔ニ九二の剛を損じ、

上の陰柔より來る時、我剛体を失つてあり、其後は我剛陽の西キをぢり、中道より北のづく上の陰柔より益てあきて、また其れより上より意するがため、我が剛中の法をふね物より情で、うき、かき、

○象曰九二利貞、中以爲志也。是以ハ陽より陰の位よりハ、

正直さあがほし、独芳中をめらぎ、正直けんねんと其

中の体を守り、志誠貞存せば、とす益て、すまな至

○六三、三人行則損一人、一人行則得其友。けり、主兩ハする

も、よりあひの同體相写して、其志皆友と見とつ差し文

主體別として、固行よりあひを、其體より三人をき、二人を損

一人ならが、友と見とつ差し、其の如きを、前のほゆは

我身を捨てるて、行よりあひ、事の如きを、剛のほゆは

久て、ありて混雜して、乱をあがよ、一筋す情で、すにあり、

○象曰一人行三則疑也。豈ふ一人行て、一人を以て、友を博

て、よほぞ、三人行どに、一人行みて、写まつ延とすがよも

ま一人を捨てるて、行よりあひ、けんねんとす、損の兩字あるとば

と、慎で、すにあり、

○六四損其疾使遄有喜无咎けあ主而陰柔主上三爻
无主而下爻の剛陽あるより意がるかよふ若れよからざる
と改換して善は從ふより疾と損するをもとすもせんい
おきてトモテあるものすと我よ疫がるよりのよたり過アハ
らばもやく改て遯河フヤクきとよりらざきバ森モミと智ふきの様
もとすにあり、

○象曰損其疾亦可喜也フタバシヨリと云はき麻煩換する極スよあり空
を換するがよ喜アガルけいおきがれ陰柔の主をもとめハ剛陽の
主をもとめよあざひあひにと改換して善はうつるの時までを
○六五或益之十朋之龜弗克違元吉アタワソムアゲニ比行キツコ主而の中
順アシテに居リてある道シテがれそむ徳タケあるよより我を換して下モ
よりのよきよりのよ徳タケよ衆ヒトと共シテよ行ハシメひ違タガフともくお善セシ
してちあがきアガクを経スルおきヒトリ獨立ハサシテであるとなまハシメよ情シテ
○象曰六五元吉自上祐也サイワヒと云はよく衆ヒトの心ハ合マツル
よよりて地ジの理リよ叶ハシメて祐カモハシメある。此シテおと情シテあらば大も
福ハシメきとあもむきよ養カモハシメかり、

○九弗損益之无咎貞吉利有攸往得臣元家アリアルニトヨロユクエテ
不ハシメも損の法ハシメすて換するの極ハシメ、意がるものぞハシメ程ハシメ剛

陽をひよのりつて、主剛をひトと損ちりとありてハよのる
の道よりわらひて、からざあぞ、ヒルおまて、トモが損ちりと
あく、モ道ゆドモと益スとあハ、得臣元家ぞく遠近内か
の限りん人のい飯根ある所よ慎でもれり、

○象曰、弗損益之大得志也、とふ、上よりて、トと损する
あく却て先を益スとハ、もよせ行フ處ヒルおまて、予すの人
と益スよ、志ある所子慎でもれり、

○元龜曰、鑿石見王之課、とりよし、精きく、損子退居せざ
シテ、もて、すにで、独ラバ、塲土為山、ごく、涼氣よ、功を遂とく
望りふるなり、

○ト解曰、澤下山上、損充澤而益良山、山脚上は良山まで、トモ
先ほかり山とは莫れず、未ありほのうるやいと風一す
是レ換まづき道よ促ツて、トセと換して、よよ益の義なり、

○火歌曰、損卦何言益、此卦換ひき、十もなるとハ、互ノ情、翁
あバ、互ノハ、トモして、もうニモあくも、

○ト彖曰、山高即隣、木大則折、是つよ、ちキ山の隣、大イリ木
の折ラズク、我シヨ損ちりとあり、せん人共益スとありて、愷也

楚^{イハリ}の心^{ハシ}、我懲^{コラシ}、私の欲^{ワタクシ}の、もからざる未來^{ヨロジ}とあり其

あくともとなき、ゆうの心まであらり、

石持

○繇曰、睽睽小事吉、睽孚睽孚睽也

○火澤睽

て、火はちぶり、火の性はのやう、水の性はへう、やうのよそ、
和合あらすより、おもきたゞよの義とく、小事よほすに
そのきゑ、たゞなるそひどこのいづきをせん候よて、相

のそしき、たゞがたゞ相よ候ゆえもあらり、

○彖曰、火動而上、澤動而下、二女同居、其志不同行、

二女は、二女あらじを居はとし、其志同行ざつは、

睽の義あり、ちよより、栗頃の居らうする徳ある

ろ、うびあらじいぬの勝て何とすもゆする中通す合モ
るれみ情のむと天地をもひて其事同ニ男女勝て其

道通すとりみど能くはいねゆく情ありてをあり、

○象曰上火下澤睽君子以同而異、往々見上は離火、

ヤミニヒアリニモニサクアルハイニクニモリテヨリテコトナリ

トは兎澤の水あり、おと火の性、お遠宵吉か、勝の象
なりと、天より是と見て、常の道すなふとなく、支の

よからざりかよ、因にすと云ひにせぎつねみて、よからざる

よかよ、与さるとすき、情めて、うじうじり

○初九悔亡喪馬勿遂自複見惡人无咎、ナウニシハ、

睽の初よりして剛陽の徳を失ひ、やまと勤め、すり悔の運

ぎす、よよ因もありて、おぼふて其悔なしを、すり悔よ。

喪馬勿遂自復、ぞく、勝て、より行、となくとも、往々

同、して、自分より合て、あらわせ、ひねるが、人の多く

ありのむりとも、乞賄棄絶となく、臣民として、化する

事、よ情の、ハ替しるをよしして、よにあり、

○象曰見惡人以辟咎也、ソリスは、勝難りに居るにげあ

ちあとせ、未の事、あんなりとも、施拒と云く、彼代
せがえて、候まくかひなく少ひの怨と、免避の情をも

ケラニ、ニヌカレザル

○九二、遇主于菴。无咎。けれ。主不卜。上の君と西、意ぢる位にかき共、暎の時が、かた風もくわ遇て、とせりぞ。イキヨクよ未て、おあふとせり。トモトモより、菴より、トコニ、君臣の道、よくあつて、智なるをせし。左經よ、よく意ぢる所よ、情ゆき持よとよひあり。

○象曰、遇主于菴、未失道也。とし、ハ、暎の時よ當て、相意ぢき君の、いはす。あ口き、巴賈に備城居し。而うんと、御永は、道哉失つむのうを。付よ、陳。ト、尚猶、岩椅と、ヒト、角。アリナリ。慎でよひあり。

○六三、見輿、曳其牛掣。其人天且劓。元初有終。ばあた至、延々、陰柔みて、二陽の弓よある。かよ、其。また、あじかりて、侵。一疇。アリ。アリ。天且劓。アリ。アリ。又前よ掣。其。また、すすむを。其意ぢる。又、情ゆきて、傷かきなし。五、が、どし。猶若邪。なる。もの。云。云。傳。エ。行。ニ。云。ざり。か。み。往。は。あ。ふ。と。り。せ。い。持。頃。ヒ。辟。み。や。も。と。な。け。の。情。あ。り。と。よ。ひ。あり。

○象曰、見輿曳位不當也。无初有終。遇剛也。とし、お。陰柔も。陽の位よある。ハ、西よ、うらばし。狼難を。ゆる。下

謂かり、殆若、猶るは其意也よりのとお遇とと増てよ
きせり、けつおそれたゞりゆうらぎしてあづからば、對

を知り、守りと固ちる、情ありてすまほり、

○九四、睽孤遇元夫、文孚、厲无咎。此ありし夕暉の時よ
尚て、恵びるありし夕暉より、孤獨なり、殆若、剛陽の爻を
以孤立立とひつも、因徳相承の理若、初めとれ報遇の義に
至、せんぬみて、徳とく文ありば、どうぞ遇とぞりて、厲とす
うらんとくふ前より、

○象曰、文孚元咎、志行也。ことふは、考すハ剛陽の才矣。
睽の時すあるても、ようと文す徳といへり、志と通し、力押
合て、けの睽と、戒とあらむど云々とげられ候、すく恃て
すらより、

○六五、悔亡、厥宗噬膚、往何咎。けあ、主乎、睽離の時陰柔
ヨテ、主乎、有あるかよ、あ、とこう互とつを下せ九二、剛陽の之
よ、歎されば、輔もて甚悔ほろびるこを經よ、甚西無れ未のい、
膚、と壁、とく、ふくあらず、わらば、和食ありてすにあり、け
いおと恃ておあり、

○象曰、厥宗噬膚、往有慶也。ことふ、人のとうするもの能

賢輔ケンカウよあくせて、其道シキドウをなすけあつて、君タマの才オナフがさる
不ハりりても、輔カウ佐サの力カミが功コウからして福慶ハクキあるこモとおと
良ヨシキ輔タスケと未タメの情シテをもて、おもひり。

良神と未の情もて吉より、

○上九 瞳孤見豕負塗載鬼一車先張之 弓後說之 弓匪寃婦ヨキタスケ
オテラフサハアメニスナハキツ

往遇雨則吉 けあひ主不睽の極まで剛のちくあると
ゑれかよ疑りにて多よりて西魚ありとつた我と睽て
孤ありがどー鬼の形ヒコにてとも一と男にて孤強ハレどよやよ
主なけきバ又弧カク城シマをぐさく寝スルきのあうとてかき
ふたり、臂嘴ヒンコウありありと清シラヘじてアモと云ト疑
と深ハラフあると云フ、我ガまきよ夜ヨクきのよシタ金カネ何ナニと
陰陽和ハセてゐるどこの情よと多からり

○象曰 遇雨之吉 群疑亡也 せんふら陰陽和合ハセて群疑クニヤ乃
うごがハしたと散ハラフすがぶり、げゆるゆて、拘ハシケよく和融ハラフして、
疑クニヤことなま、松マツよ情シテてよし

○元龜曰 猛虎陷井之謹シク、せりふたけち虎の井アシよ何ナニがご
く、脣救勞苦言ハシメテをなすとあくむ証シテと能ハシメテ能ハシメテて、毛ウツメを

○象曰、遇雨之吉、群疑亡也。坐不尚、陰陽和合して、群疑乃
う、シテ散ハシマリちあり、ハシマリげゆるゆて、拘ハシマリく和融ハシマリして、
疑ハシマリきとなき、私ハシマリよ、情ハシマリてよれり、

○元龜曰、猛虎陷井之課、シラヒタクたけき、虎の井ハシマリのうがご
く、チラヤラク昼夜勞苦、ハシマリをなすとあくむ、訟ハシマリのと能ハシマリ正ハシマリ極ハシマリて、ハシマリる
かり、

○ト解曰、睽爲卦、上火下澤、性相違背、ハシマリをも、ハシマリひり、

性をもつたるより情がけき、物の所てあり、疑一き
事よりして何處にもとあらん、小事よりは吉よりて、害カイなうら
むと云ふが利。

ト彖曰未大多阻占小得祉
セトニレバ タイタラムシハヘダヘリシムレバ 美ウラウナリヲ
就
ソヤシ
聖人曰はたなるとハ 阻隔の

見て、小かると、成乾あら、も拘の疑クサヒりにとよあやしもせりを
禍クサヒなうらも婚姻のとれハシテのひづくありとも後すは左

弘化

○ト象曰、火澤相煎有別離、暫時睽阻後相知、と云は火の
力と炎^{セニ}が^{セニ}あが^{セニ}てあつたも、後^{アヒ}は^{アヒ}知^シ
音^ノの^ノとも^ノ、も^ノ他^ノ事^ノを^ノ思^ム、^ノ心^ノ事^ノ済^ムて^ノ
う^ノよ^ノと^ノな^ムら^ムと^ノあ^ムる^ノ、

○評曰、睽者背也、兩情相遠、といふて、よしと人と遠ざかりあり、
かへは口舌あり、財用の散失サニツありて、人と離れてころとけん、
せらわあまもよひかり、

○天澤履

○繇曰、履虎尾不咥人亨、履豐卦もどよりむき、履の道よ
あゆて、陰柔也。もろに走る剛陽の徳より亨、履藉る極よ
あるは、下ト其爻よかひふて、もきせし共、つ陰走る剛陽をふ
むとハ危きとも可き也、初說の、虎尾に走れバ、虎乃
尾挾履て、よおき害なし。して、よにせし、ひん持つて、
人みさかでなく、か合ひると、わ慎なうの慎みてを、
○彖曰、履柔履剛也、說而應乎乾、といふハ卦上は剛乾
より、下は兎說の陰柔なりぞ、吉徳より先說の陰柔なりす。

剛乾のちよきよ履藉ともどもあまうざふてりるのみ
志たぐひ陰の陽ようらる、商賈の理までよきせせりおとるの上
君のあみの申のたゞにまで其位がありて、廢かず下モ
よ臨むよ、主従けりんより、私よ情でしになり、

○象曰、上天下澤履君子以辯上下、定民志。といふは天の上
よりて、ほのりよけり、よりのたゞ安理なり。君子は象をえんて、
よりのを限ざさぬ、萬民の志を定め、のうせぎけつねまて、
トヤの正をとめかよな、衆人の志を宣へ私よ情て、主家
そのふとありてしにり、

○初九素履往无咎、巽行、主兩ハ履の初めて、リヨナあきせ、
陽剛のちよに才力よすり、より進ム、履キメ候ニ、能を驕たら
づく、とゆる時は、よからざしひぞ、衆の飯糰、苦草て、モ身を疾
ときりうごそく、モからむお急じて、がすり守ル、处境、変むる
なよて、往々に、皆がよしてしにり、

○象曰、素履ニ往獨行願也。と云は、人の上り進とあるとは、
我が願アレの道を行とあるぞ、されど君よ、モ身を急じて
行ひ、もかとねがひざるより、我ガ身ふらするて、我なきぞ
して、利とちどもらずて、なほの情ゆもよしなり、

○九二、履道坦々幽人貞吉。けあり歟剛の主をなれど陰の位まで中絶するがよ、寛裕ありてゆ、うす道を履くと至るて、うきぞ、日用の事乃至りひが、其身はもくして狼狽隕伏の主成らざり、主西國守りて、主をぞ、此存するを陽の志、より進む所まゝ幽人の道行りどく、モ履てれ矣ナリを、懲懃なりは、至てあらり。

○象曰、幽人貞吉中不自亂也。心不以道を履て靜す、めにて、裕なるを、陽を効て何とかよ、躁寂かくてハ履ふ、而あドガ、きぞげん持ゆく、幽人の道行りどく、堅固すたゞ、あまく、中心補安し、利欲を心からせざるさげる、松木也であらり。

○六三、眇能視跕能履、虎尾咥入。武人爲于大君。け何を而は陰うて陽の位ありがよ、剛引り主がされど、やうり陰柔たりがよ、眇跕のござり、祀て、神をあらじ行つて、過行ぎ、柔弱なりの、もすたゞおして、剛強なるを、行つて、過行ぎ、柔弱なりの尾を履て、咥がよ、禍のとすぶて何とかぞ、其人の大君と如くもとある松木、権の人のよあまて、暴危がろとあきて、害行るがよ、まことに之極がさざ、我身自由す

○象曰、眇能視、不足以有明也。跛能履、不足以與行也。咥入、位不當也。武人、爲于太君、志剛也。○九五、陰柔而居、位不正也。其往、其三、其士刲羊也。○九四、履虎尾、愬愬終吉。○九三、履虎尾、愬愬终吉。○九二、履虎尾、愬愬终吉。○九一、履虎尾、愬愬终吉。

○象曰、眇能視、不足以有明也。跛能履、不足以與行也。咥入、位不當也。武人、爲于太君、志剛也。○九五、陰柔而居、位不正也。其往、其三、其士刲羊也。○九四、履虎尾、愬愬終吉。○九三、履虎尾、愬愬终吉。○九二、履虎尾、愬愬终吉。○九一、履虎尾、愬愬终吉。

○象曰、眇能視、不足以有明也。跛能履、不足以與行也。咥入、位不當也。武人、爲于太君、志剛也。○九五、夬履、貞厲、其往、其士刲羊也。○九四、履虎尾、愬愬终吉。○九三、履虎尾、愬愬终吉。○九二、履虎尾、愬愬终吉。○九一、履虎尾、愬愬终吉。

○象曰、眇能視、不足以有明也。跛能履、不足以與行也。咥入、位不當也。武人、爲于太君、志剛也。○九五、夬履、貞厲、其往、其士刲羊也。○九四、履虎尾、愬愬终吉。○九三、履虎尾、愬愬终吉。○九二、履虎尾、愬愬终吉。○九一、履虎尾、愬愬终吉。

さがり、危道ありらざる所す、情と財路す、あざぶん
持みてあらり、

○象曰、夬履，貞厲位正當也。どうひ、吉位よけ、るとのを甚
勢すまかせて、我心乃まくよ。ちかくおなして、をそれ候。と
ふけき、危き玄程か、もく候て、至勢位がたのむ。し算
してあらり、

○上九、視履考祥，其旋元吉。此何、主而貞上あて、履の強
よあらず、も履ねあらふ。延乃、善惡極かんが、あーとき
よりはうつり持めどもにこ、玄程ト、抑廢かうらふ而

周旋してあまぬ。拘乃虧玉、打きおよ情まで大吉あり、

○象曰、元吉，在上大有慶也。ことあら、履の強りなきみす、

いふみねこあふと、毛無味す、情あくば、大引り福慶の、も

うじあく、むくのけひ何々と、始終味全情にわゆく、よし、
元亀曰、如虎尾、安中防危、我身壓まんむと、壓まんうち、

危きとあむと、ちく、一ミあらの義、

○ト象曰、以小制大，虽險无傷。さうすは、陰柔ある、剛陽あり
を制すと、ハ弱かざき、ちみ従う、薄氷破ふむぞく、大柔す
情、財路すなき、バ、初ハ、ゆくが、さあし、後すは吉祥の、さい

○弓弓弓もとソアミカリ、

○ト象曰履卦當順礼行勿移斜徑大虫驚、といひて履の

身小れ義たゞしくとものうぞ斜徑ハ少あるて邪路のひぢ

ちほよ邪なり路ふ移と弓弓ハ大虫驚るべく危事ありむ

多く始終の情弓らバ福徳のなき弓もとソアミカリ、

ト解曰履者踐履也拘とく慎我身み省てをやまきあバ

危中より弓も言せばくとなくもとソアミカリ、

○十干詩断曰逢山須涉險遇水亦防憂云て山の險ぞ水の險

如弓なりてあらむ波もお波情ありて危弓よ近づくと引して至

○風澤 中孚

○繇曰中孚豚魚吉利利涉太川利貞、中孚ハ

こと小あれふどもぞ人の孚あると久トけきバ鬼神は

通ド天地キモ勅とて何う豚魚ハヤモトモ有るもよ

物の歟ドジテ在矣のやう豚魚まで歟がふハ孚をほ主

のりうり況衆人よ様く廩せきと云をめしばんわふて大

川のどく難難の所をも波たる枯木、而發情少く吉也、

○彖曰中孚柔在内而剛得中說而巽孚乃化

邦也、云ハ陰ハ中虚也、肉少て信を彰るの義と次陽ハ

中宮也、上車の中よめまで、手帳かき、駕籠を乗る中と次
上ハ駕籠少く、ちじびトハ先少て、もう、駕上、手ト並て、下モ小
手ト並れ、下モ手ト並く、上をもろこぶ、上車の便を通じて、玉
家と化すなり、けじお少て、た川の険難も、本末軽て、あく
流覆する变なく、だま爰手ト並て、天の道み意ぎるの、
情ゆくものなり。

○象曰、澤上有風 中孚、君子以議獄 緩死。上云ハはの
トヨルめきバ、下半小底ぢりぞ水の体虚タキヨなるが故よ、陽もく
ヘルがぞく、人の處ある小より、拘るく底ぢるとあるハ中孚也。

象や、君子もさへく、誠を讐り死を獲むはむかて忠
誠のゆゑと稱ひし人物をめぐむの時少く有なり。

○初九 虞吉有它不燕、山幽而ハキ字の初やく、上の六四
小畜ちるかよ、とく信小玉ヒトコト、きを虞度ハカリ、モ字ハカリテ、あきバ、吉あ
き、西ニシを失ひ化の志シあきバ、あからざるはあきを、ふせぎ、
皆ハタチもすり、

○東田利九、農吉、志未妻也。といふは初のと、字の初すめ
たゞく、邪あら変ともありふせきて、もと道城守一、も源と在を
きバをひりや、若は初小枝く、字トを失フと紀ハ、あからざる変

其時でよりあり、

- 九二、鳴鶴在陰、其子和之、戎有好爵、吾與爾靡之。
はあすか半つ、剛ゆくはす室あるハ、孚トのありなり矣。モ孚
トムエバ、わふ國通キラヌ、鶴の凶陰小あリて、衝トハ、厭ざれど、
其子聞知く、お魚ざるどく、孚の心深けきバ、トヨトモ意にて、
廩通するト、鶴鳴子和もるどく、少く、遠
近衝、そりく、人相應ざる處、少く、情あリモ、告あり、
○象曰、其子和之、中心願也、と云ハ、我よ誠の意、あリモ、射
而よ通、もる變ハ、主孚ト、上よ廩急すれバ、あり、けいわざれ
セシモ、而してりく、誠れ通、もるの、情、少て、もれあり、

- 六三、得敵、或鼓、或罷、或泣、或歌、はあすり歎ヒトの宗
ハ、あきをけ西あす、さあらのあり、八卦三界のニ爻ハ、孚ト、ふま
主たり、六四は主位をゆく、上よあこづとも、六三ハ位正から
さあれす、志を立づらリテ、敵、とはども、ばく翁が快、いよがる
事あ、バ、戒、孚のならむかとを、わきひく、三時を、倚ねよ、至
て、おなか。

- 象曰、或鼓、或罷、位不當也、と云は、陰と陽の位、ある
故、よあくらぎして、ほうきぐら變なれ、げじ、とく情、正變を

ゆバハの信トと志方曳あくも、

○六四、月幾望馬匹亡、无咎、宥てり处ら孚トとも主也。

君と身き停まあるも、其正更をゆる小も、九五と見を信
ずるれ、月の望ふちうにぞ、満きんなりむと歎、御ども、みちて
さんなるハ臣の少小様、君とおときは福の承知あり、
鑿不與不して、未滅をすと歎、ばつわと情ども、とくとくとよき
ぐひて吉也、

○象曰、馬匹七、絕類上也、と云は、やよ難きものありとい
つても、難ともあれて、とよく、以て、私小され
ざるの情ゆくとよき也、

○九五、有孚惠如、无咎、けれり處と君の位也、人も君
たるの道ハ至誠のることと、衆人よ歎通し、衆のんとが、
く徳ぞく少くよびぞ、けいわと、孚成なまの主とあり、其位
小居く、リよ信せらるゝ事と、临てよき也、

○象曰、有孚惠如、位正當也、と云は、停まあるも、中
正の道也、くも、是を、衆人是を信して、其位よ叶へり也、

○上九、翰音登于天、贞吉、は、萬々如聲、孚の終少く、孚ト乃

至きらふるを。あく、肉は家集て、か養すかぎるがじ。輸音
のちよのがるがどく、ねちひちよ聞て、あきども、寔体ジツテイ、ハちどぶ
トモ、ねじ、ほじわかく、け字の核カコよあきて、モ近モソ、莫モからうを知
て、モ止モ事モシタや知モシタれバ、要通モシタの程モシタをとむモシタ。さうものゆくモシタて、
しき事モシタと、思モシタぐよむあり。

○衆曰、輸音登于天、何可長也。とうふは、家モシタをちて、其極
小モシタが、ハ、ト、に、廣モシタなままで、要モシタと、あらざれバ、久モシタからざモシタ。けし
わゆく、字モシタの名モシタあきてても、字モシタの、字モシタかきモシタは、たむよたりモシタ。虚
名モシタと假モシタ、尤モシタ更モシタを好モシタバ、もやうざモシタの、情モシタきて、よむあり。

○元龜曰、鶴鳴子ツルメシコ、和立課ワスルノ、どうは、鶴の子遠モシタすありて、も、
至モシタぐの色モシタ聞モシタ知モシタどく、要通モシタえて、字モシタもみの取モシタや、まの
定モシタ、移モシタまか玉モシタ小時モシタをみモシタ、さうは、惜モシタ少モシタて、よむなり。

○ト解曰、中字モクフハシナリ信也、肉モシタ常モシタ小モシタ、誠信モシタの徳モシタありて、人モシタもよ
びさモシタ、衆モシタの、れ、庶モシタじて、肉モシタ介モシタ弥モシタ字モシタもて、吉モシタ也、

○ト彖曰、天地養育モウソウヒトトキ、人貴モシタ和向モシタ、どうは、天地の偏モシタ劣モシタ、
均モシタり、よし、御モシタす、よどく、衆モシタと、相應モシタする、いわふして、よむなり。

○ト象曰、中字モクフハシナリ礼義モクフハシナリ世間モクフハシナリ、元卑モクフハシナリ澤沾恩モクフハシナリ、至涸モクフハシナリ魚モクフハシナリ、と

○ト象曰、中字モクフハシナリ礼義モクフハシナリ世間モクフハシナリ、元卑モクフハシナリ澤沾恩モクフハシナリ、至涸モクフハシナリ魚モクフハシナリ、と

云て、中字のれま、云々をこるゝられば、單方よ無ありて、固莫
とうかもぞく、物うへて、ならむと云々をもむ。

○十干詩断曰、鶴鳴和子、本誠心、とうかむすびて、時ハ鶴
の子違ふあつても、其色わ和きるぞく、家ト物共處通じて、
全トモリて、かからむとづかえ、なあむとづかえ也、

風山漸

○繇曰、漸女歸吉利、貞、漸占もむとゞも、卦の
二爻、陰陽もく交く、正位あるが、女之歸と義のぞく、男女た
しに便く、さのの義と歴の軌よりきみの事、小進、当席め
里、主序より遠不時は、吉以陵き、差以犯し、よりからぎけん持
こそ、次第せたゞ、至極ひぢ越るよむれの情をもとまゝかり、
彖曰、漸進也、女歸吉也、進得位往有功也、といふは、
漸くよきむの時も、陰陽正一き位を得く、近よより功をみて、
主家より出とひ、ちりよも及ばずてよど、八卦の九五、陽

剛中正の徳をひき傳よ聖もこうり、其とあつて能ふも追跡
ときありむきのいわど以御み遠とむと極よ恥もて也。
○象曰、山上有木漸君子以居賢德善俗、と云は山の上
小木あつて、至もて、因とあるハ漸の象なり、君子は象と見
て、賢善の徳を身を置く、自行く、漸くよ徳を多くもあ
るゆがまし、はむおよて、身よ徳と行くは徳を移一易て可
能の徳をくむなり、

○初六、鴻漸于干小子厲有言无咎、けあひて市へ鳴り
ゆふよらう鴻の水ともられて、干小卯びくとよきむ
と佛よせびして、拂く小卯びの義と歎、鴻の切あひよ群と
失と拂思うてとある時、長ぜうの後承と、是を俟候りゆる
と向うと、小子有言厲无咎と云せ、けん持され時の序の宜と
ひづきの情よてよきなり、

○象曰、小子之厲、義无咎也、と云は、鴻の始よりて、君子
ちくまんとまれば、序と失、義よ遠て宜へからむ、吉徳よ君子、
あむよとあき共、漸みすみすよちがふよらう、无咎と云
○六二、鴻漸于磐飲食衎々吉、けあひて市へ牛馬の道あ
里て、の五の君よお魚まろよらう、まむむと辛夷よて、飲食不

足るく、所ことなりもと、鷗の巣ゆうふあまく、物と喙
をうちことわにびしげにわすて、よひすよ脚ご、物ご思ふ
めらむ、弥^{イヨク}トモ鳥もる柄す、心どよむがり、

○象曰、飲食所^シ不素飽也、どうはと中^ニの体^ト、中正^{ハサハナシクアカ}
焉^{アフ}よ連^シく、トモまきみて平ある^{アラタ}、殊^モ道^トすすく、室^{シテ}食^ス
さるの情^トあるそとむなり、

用^シ

○九三、鴻漸^{ハガツスム}于陸、夫征^{ハガニハツトユイテ}不^ハ復^ハ、婦孕^{ハラムテ}不^ハ育^ハ、利^リ御^{セギニ}寇^{アマヲ}
也^シ、^{ナシクシラワ}業^ト、^{ナシクシラワ}下卦^トよよ^トして、漸^シよ進^ム、鷗^ハの木^トもれ
て、平^タちのたうに陸^ヨ、^{ナシクシラワ}も^グぞく、陽剛^ミ、^{ナシクシラワ}陽位^トあるね^ハ、

志^シ進^ムる所^トあり、進^ムレバ、鷗^ハちのりのりからも、左顧^ハ右顧^ハ、貞正^シ
きぢり、平^タなる所^トよ寂寞^{ハシムシ}まれば、漸^シの道^ト得^ムよど^ムぞ、^{ナシクシラワ}持^ム
ゆく、^{ナシクシラワ}守^ル邪^{ヨロシニ}、^{ナシクシラワ}寢^メせざ^ム、^{ナシクシラワ}寂^シとふせぐの、情^トあるそとよき行^ハ、

利用^ハ御^{セギニ}寇^{アマヲ}

○象曰、夫征不復、離^{ハナレテ}群^{ハシメテ}醜^{ミニラ}也、婦孕^{ハラミチ}不^ハ育^ハ、失其道^ト也。○^ト

云^ハは、我^ハこのむ返^ムち、かひ正^ムすかづられバ、漸^シの正^ムよから
ま^シて、^{ナシクシラワ}群^{ハシメテ}醜^{ミニラ}也、^{ナシクシラワ}も^チよ儀^{ハシメテ}道^トよ
らざり思^ムせの、^{ナシクシラワ}ね親^ハよからざるぞ、^{ナシクシラワ}心^トあかく、^{ナシクシラワ}君^トのモ身^ト城^ト
全^シて、少^シとも非義^ハなち^ムりあめ^ムる柄^ト、情^トあるそとよき行^ハ、

也^{保相}順^{ナシ}

○六四、鴻漸^{ハガツ}于木、或得^ハ其桷^{スム}、无咎、^{ナシクシラワ}莫^{ハシメテ}及^ム乎^ト、^{ナシクシラワ}懈^ム

むの附子尚て陰采の仲と、剛湯のりのとよより、鴻の本
よきもぐぞくよして、安^{ナミ}じがし、先去、得桶无^{トガ}者と云ハ桶
は平^カけり柯^{カク}なり、鴻のあよをもとも平^カがる柯^{カク}があらば、安^{ナミ}
りとあらんけん持^{ケンシテ}て、其ぬまの下^{シタマ}に候^{ハシメテ}、備^{ハツダリ}て、
○象曰、或得其桶順以巽也、と云ひ、剛湯のりのとよ
あまて、安^{ナミ}じが事^{ハシメテ}あらば、卑驚^{ハシメテ}して、崖^{ハシメテ}あは
れ^{ハシメテ}、あらば、斥^{ハシメテ}あか^ムもと云々あり、

○九五、鴻漸于陵、婦三歲不孕、終莫之勝吉、^{ハラニツイニナシコレニカツイキツ}
處^{ハシメテ}は、鴻のち、下^{シタマ}よさくみ、止^{ハシメテ}ぞく、君の位^{ハシメテ}もと^{ハシメテ}、
畏道^{ハシメテ}よ行^{ハシメテ}が、きを、去^{ハシメテ}よも、二^トよ西^{ハシメテ}あれば、観^{ハシメテ}くなけ
と未^{ハシメテ}どまれ共、履^{ハシメテ}つるりのあよ、ばんわと忙^{ハシメテ}て、邪^{ハシメテ}よ
従^{ハシメテ}く、終^{ハシメテ}は、二^ト五^トね^{ハシメテ}どくを^{ハシメテ}む、ばんわと忙^{ハシメテ}てを處^{ハシメテ}、
○象曰、或得其桶順以巽也、終莫之勝吉、得所願也、^{ハラニツイニナシコレニカツイキツ}

と云は、君臣中正^{ハシメテ}、ね文^{ハシメテ}、^モ通行^{ハシメテ}、^{トコロヲ}立^{ハシメテ}勝吉、得所願也、
云^{ハシメテ}あき^{ハシメテ}、終^{ハシメテ}よハ西^{ハシメテ}よかつ正^{ハシメテ}、行^{ハシメテ}、^{トコロヲ}立^{ハシメテ}勝吉、^{ハラニツイニナシコレニカツイキツ}
上九、鴻漸于陸、其羽可用為儀吉、^{ベシモツテス}ハ^{ハシメテ}當^{ハシメテ}は、^{ハシメテ}上
も^{ハシメテ}位^{ハシメテ}よ向^{ハシメテ}て、益^{ハシメテ}進^{ハシメテ}と、鴻の止^{ハシメテ}離^{ハシメテ}て、雲路^{ハシメテ}飛^{ハシメテ}、物

のまさらうなむあり、賢達の人々の行ふ事とその法則、
儀表ともども、きびしけれどぞ知く、モ伝ヒヨ田あされざる
事ヒヨ、情ヒヨをもひり、

○象曰、其羽可用、鳥儀吉不可亂也、と云は、もす乃
進ヒト失次第、モナニナホ、極くちによ進ヒテモ、モ序ヒ不
礼モテ、人のは儀と成の事ヒリ、けん持モテ、ちによ進ヒテ、其
志ヒと礼さざるは、情モテ、モナホリ、

○元龜曰、高山植木之課、セラフは、少々ふきを拂フ、
ル本と如ラムと云焉かリ、

○ト解曰、漸者進也、從下升上、不遽進之象、と云は
次第と度く、もののあり、若追退疑、ちき、モナホリ、
まゝ人情持ある時は、ちかくむ、

○火贊曰、觸、更、延、遲食、不、未、飽、と云て、まみ厚く、

ら、もくとも、漸く、小第、と多く、もつじがあくも、

○火歌曰、漸々修熟業、熟功をはくで、もゆく、ばす本の
物長く、もく材とがごくわんばと免とをこうらざる
事ヒヨ、小して、モナホリ、

○ト彖曰、如木生地、不知增高、と云て、木の成長の知

ざるごく、まことに極よあつた。次第よ奉度あらむと云ふ也。
○十干詩断曰、幾度江邊釣、游魚の約よ、船上釣、どふは乞
小舟され共、游魚の約よ、船上がごくなる共、主支々^{トシ}主
阿里てハ心頭^{シントウ}を、あくらむとあるもと云ふ也。

○○震爲雷

○繇曰、震亨、震來觀之、笑言啞々、震驚百里、不震^{シキ}し
鬯^{トシラリ}、震ハ妙^ミひうごくともむじぞ、卦一陽^{トモニシモ}生じて、^{トモニシモ}す
とあれど、二陰上^{トモニシモ}すあきて、かく變りうぐに、陽ハ動^{シテ}小至^{シテ}大^{シテ}か
玉あらず、震の來^{キタ}時をもろびく、あくまき變あまとも、まつあ
瞬^{モニシモ}、微微^{セイケイ}と乍りて、仰^{モニシモ}んせん^{モニシモ}れて、甚^シんとあざら^{トモニシモ}、情^{モニシモ}
なき^{トモニシモ}、もうちが功^{シテ}ふくと、をありとりす事^{モニシモ}也、

○彖曰、震亨、震來觀之、恐致福也、と云ハ震の亨^{トモニシモ}也、
壬方ありよするを、震の來^{キタ}時の^{トモニシモ}ごく、恐^{モニシモ}をふして、惜あれバ、福^{モニシモ}也、

是も主にぞけいわして、危支アキラキと候シテて存して、正き時ハ、衆乃遠逝エシヤンと號シトロカきどく、邪魔ウカイも聲ボムふらりて、宗祐ソウヨと保モチ子孫チホとも福ありて吉なり。

○象曰、游雷震震、君子以恐懼脩省、ト云ハトトを勤イテ、處テ電テ也テ、きりよすの時也、君子は象シラカブ、恐懼マウリとマウリして、天テの道トキ守ル、脩省ミラセイとミラセイあかリんス、モ身シを惜マツメ、因アシキてアシキ改ムの情シテをシテあかリ。

○初九、震未覩シニノキタキ、後笑言啞ゲキクタニ、ミラガニ、吉、けあ、勿シ如シら、王侯ウフの主シテて震奉フルフコトとヒトものト、卦トの下トありて、ト恐懼マウリとマウリして、

○象曰、震未覩シニノキタキ、恐致福マリトハラシテイタス、不サヒカイ致福イツ也テ、笑言啞ゲキクタニ、後有則ヒタチハチニ也テ、ト云ハ震の時トクをシテそれシテ、モ主シテて、福トつムとアムむケム、持小常ホトトの持ハサトとナグ、とリキ移シ、情シテも經アリ。

○六二、震未厲シニノキタキニエシシヨモニヨモニカルウギハツクモナトル、見躊躇ミタマシ于九陵リヤワニナケビ、勿リ逐シテ七日得シキジツニヤウ、は尚シテ知シテ、中シテよあきシテ下トの剛陽カニヤ、少シテて勤ハサウ、上トよ居シテ、妙モウちアリ、未シテ厲ハサウ也テ、主シテをシテ敵シテ失ハシム、主シテ失ハシムとアリ、は、翁シロが守ル知シテ失ハシム、主シテ失ハシムとアリ、

あらんと云葉や、

○衆曰、震未厲、乘剛也。と云ハ、震弱の時を、剛強なる
と云所もか、震の柔き、刚に極すを、震うきを、ちよ候、物申セキ
情とも、震くはきバ、モ罪とのがまくよりなり。

○六三、震蘇々、震行无眚。は尚、而は陰柔少く、陽位よ居
ひ小卒生あ。一が既変か至、よく忍て、西よつくに往く、情ありバ
告ならんと云葉や。

○象曰、震蘇々之位不當也。と云ハ、形變を位よあひる
べく候をそれ候。とあらば、ヨリのぐくとあるむ。

○九四、震遂泥。はあくま段々、震動の時よあひて、陽剛あれ
陰柔の位よあらよする中、西よあらざして、剛健の道哉もひ、少
て物よ備非柔よ陷さるの、情ゆくよにあり。

○象曰、震遂泥、未光也。と云ハ、陽ハ剛よりの、震ハ動く大
小事。とあらんとされし、主陰の中よ陷ふたり、陽陰の位をあら
可生えども、けいわゆく、情ゆくよにあり。

○六五、震往未厲、億无喪有事。はあくま段々、陰柔まで、陽
の位よ至とハ、主位よあらざれ共、中傳あらゆのぞ、古トナリ、トニ

きみさる支ハ、衆のよきよそなまけふく、レヨネルハ剛のほれ
おおまかはるを、往來か廻うに變あるぞ、けしわそ、とく思ひま
せばよも、がち極よ、よからざるのよ、あこしむを、まきの、情よてよき
○象曰、震往未厲、危行也。其事在中、大无喪也。と云ハ、未
行とも、レヨネルとも、屬すゆき、あすは、行動をとる、モ支けずは
往うよ、守あたそをや、けにあゆく、事エヨ、け仕ど、とむき難
もすりんばかり、情ぞよんばかり、

○上六、震索々視、矍々征。震不于其躬、于其鄰。无咎，婚
媾有言。と云ハ、陰柔少く、震動の極むるを、警悟となして、
安貞せざるを、吉より、進まるるを、あわてハ、あきぞ、震支モ、引
あきモ、モ、隣よりありば、わよそ、隣と、あくび、宵の、易よ、をとぶ、方
子、皆あハ、咎無くて、をなせ、固ド數をとしき、内よ、然咎のとあらむ、
白と付くよにあり。

○象曰、震索々中未得也。雖、山无咎，畏鄰戒也。と云ハ、中道
をなざるを、遊々くハ、あきぞ、若あき、交あハ、早、交じかくよ
きこそ、隣接凡くを、それあきバ、御家よ、來ざるの心持ゆくよにあり、
○元龜曰、震驚百里之課、と云ハ、震の遠、其聲も遠く、御行の
若あきよよきて、人の耳目と、あとうを、莫あきよじり、すく情ありて

よりて、畜ハ声あきを、形のむゆなきものぞ、ちよ依リ物の實也。
木よ、いわせくすれりあり。

○ト解曰、震者動也、陽ニ陰のによあひて、動すなり、ゆき度を守らざ、

情あらば、帝なりざるのもうごびゆくも、

○犬賀曰、重雷發響百里飛色、震のかきあり、響者百里小安昌
ぞくから變あり、一、響者多く形をえざるをく、突跡のなき枯木事

あも、

○ト彖曰、動則有喜、あるに变のあへきとば、改て益あり、あると、
今下りもよし、からむ、只時の齒折と、をんぢりてよむあり、

○ト象曰、昨日、冬枯樹、春末、長萌芽、と云ハ、冬の年枯る
本も、春來きバ、又立ちと、生むるを、好事、とがる變あるを云、

○十干詩断曰、紫府門闈、特地閑、といふは、家用つ戸あら
たまうぞく、時の万々あふく、其澤を、ふむるをあむと云也、



